

第20回研修会講演①

大学に求められる図書館の取り組み —機関リポジトリの構築を通して—

埼玉大学図書館 村田 輝

大学に求められ、必要とされるために、大学図書館は何をなすべきなのか。埼玉大学における機関リポジトリ構築事業をめぐって、この根本的な問題について述べる。

大学図書館を取り巻く近年の状況変化の中でも、

①知識基盤社会化の中で、大学の教育・研究と社会とのつながりが強まった。

②インターネットの発達で、利用者は図書館に来訪せずに情報を探索し、入手するようになった。

③電子ジャーナルの発達は研究者の利便性を向上させたが、財政が資料費の高騰を支えきれなくなった。

といった点は、大学図書館に新たな取り組みの必要性を生じさせている。各大学の財政状況や経営判断の違いより、図書館間の格差が広がり、存続の危機に直面する大学図書館もある中で、機関リポジトリの出現は新たな可能性を切り開くものである。すでに機関リポジトリは大学経営、学術研究、学術情報流通にとって必要不可欠な要素となりつつあるが、特に、

①学術文献のオープンアクセス化

②研究成果の公開義務の履行

③大学の社会的プレゼンスの向上

④研究者自身の研究プロモーション

⑤研究成果視認度の最大化と客観評価

といった点で、様々な可能性を秘めており、その可能性を最大限に引き出すことによって、大学と図書館に大きな力を与えるであろう。

埼玉大学では、大学が必要とし、図書館にしかできない役割を遂行すべく、機関リポジトリをめぐって次のプロジェクトを進めている。

(1)機関リポジトリSUCRA-IRの構築

(2)研究者総覧SUCRA-RDの構築

(3)埼玉県地域共同リポジトリの形成

(4)視認度評価分析システムの開発

埼玉大学図書館が導入を進めている研究者総覧システムは、研究業績情報と機関リポジトリ、電子ジャーナル論文、Web of Science等のリンクを形成することによって、研究者ポータルとして機能させるとともに、個々の研究者情報がGoogleやYahoo!に直接ヒットする構造を取ることににより、研究者と研究業績の視認性を最大限に

高めることを目的としている。研究成果は、内容が優れているのみでなく、今ではインターネット上での流通が効果的に行われるのであれば、その評価を高めることができない。従来、研究者総覧システムは研究協力等の部署が担当し、図書館が関わることは少なかったが、研究者総覧の中心は研究業績データであり、書誌情報や学術情報流通のプロである図書館が中心となって構築を進めなければ成功は望めないといえる。また、研究者総覧による研究業績の把握は、機関リポジトリの充実・拡大に資することから、両者はその相乗効果によって真価を発揮することができる。

埼玉県地域共同リポジトリは、埼玉県大学・短期大学図書館協議会(SALA)と埼玉大学が共同で実施している事業であり、埼玉県内の大学等への機関リポジトリの普及を目的としている。埼玉大学が所有するリポジトリサーバと、システムやデータ登録に必要なノウハウを複数の機関が共有してリポジトリ構築を進めることにより、各機関は最小限の負担で機関リポジトリを持つことができる。将来的には地方自治体を含む県内各種機関との連携により、埼玉県と世界をつなぐ地域の情報基盤として機能させていきたいと考えている。

視認度評価分析システムは、機関リポジトリと研究者総覧の連携によって、論文数、機関リポジトリからのダウンロード数、Web of Scienceでの被引用数などを各研究者、部局、機関の単位で総合し、出力可能とするシステムである。現在、信州大学、慶應義塾大学との共同で開発を進めている。このシステムによって、研究成果の学術研究や一般社会へのインパクトに関する客観的な情報を提供することができ、研究者自身による研究プロモーションや大学の研究戦略の策定等に役立てることができ。

以上の各システムは、その全体がSUCRAと総称され、埼玉大学が最終到達目標として実現しようとしている教育研究活動データベース新システムを構成する予定である。新システムは図書館の枠組みを超えて、情報公開、大学経営、研究推進、学務、評価、地域貢献等の大学の様々な活動に資する全学的システムとして、絶大なる力を発揮するものと思われる。